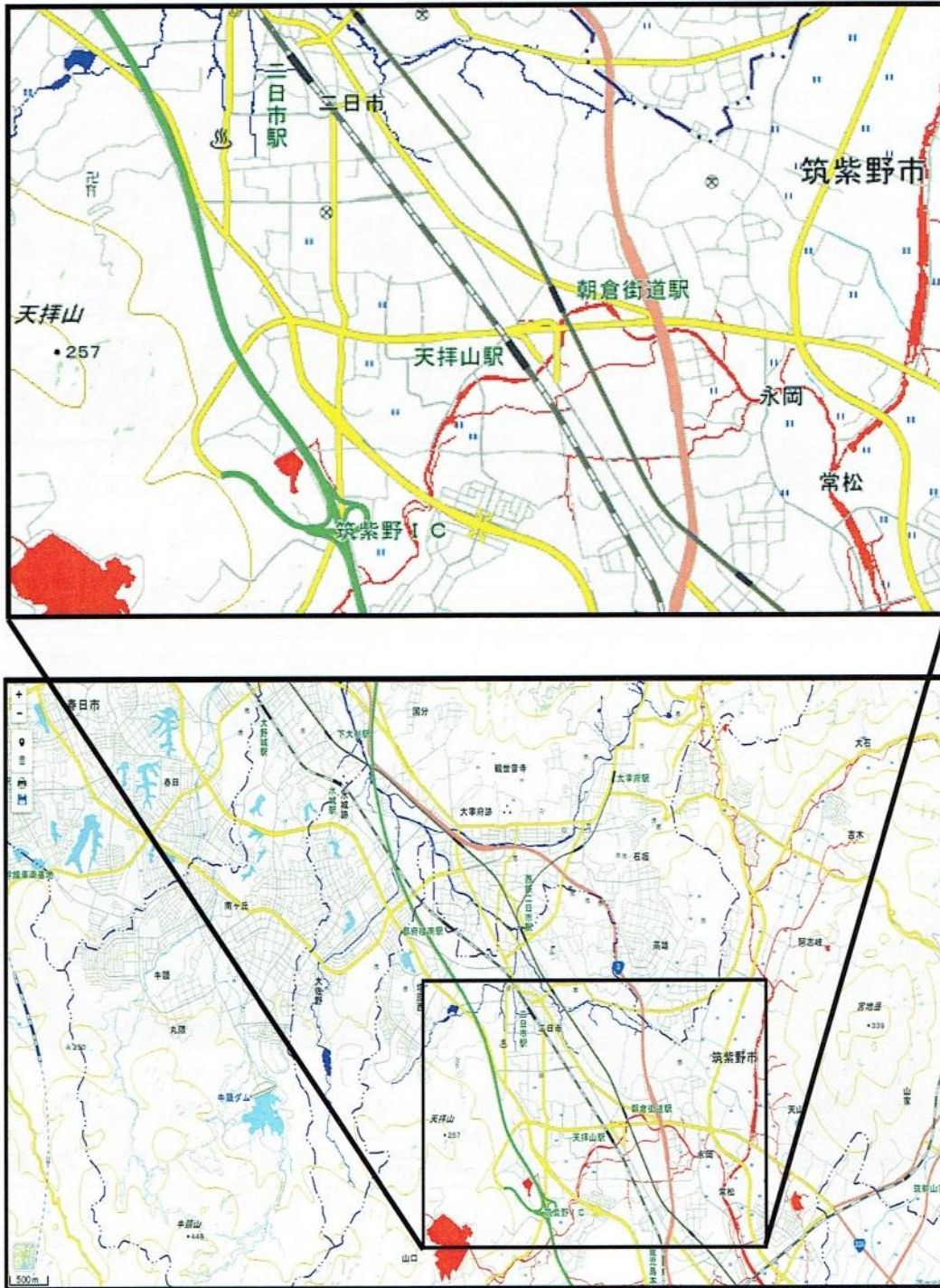


日本一低い分水界 太宰府

南 寿宏

下図は、福岡県大宰府付近の地形図の水系を着色したものである。青色は博多湾に注ぐ御笠川、赤色は有明海に注ぐ筑後川である。この図から、J R鹿児島本線二日市駅と天拝山駅間に分水界が存在することが分かる。二日市駅周辺の水準点は34.7m、天拝山駅周辺の水準点は38.0mなので、この分水界の標高は、40m前後となる。日本一低い分水界といわれる由縁である。



国土地理院ホームページより 太宰府付近の地形図に着色

1 はじめに

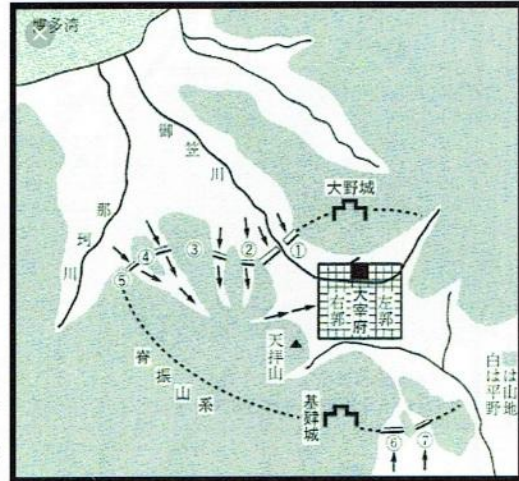
分水界とは、地学事典によると、次のとおり。

分水界 divide, watershed

表流水および地下水について一つの流域と他の隣接する流域とを分離する境界。一般には表流水についていう。流域界は同義語。表水流の分水界は一般に山背や山頂に沿ってのびるので、分水界となる山稜を分水嶺 (water divide) ともいう。本流相互の境界線を主分水界、支流相互の境界線を副分水界として区別することもある。

[山本裕之・高山茂美, 地学団体研究会編 新版地学事典]

663年、白村江の戦いにおいて、中大兄皇子（後の天智天皇）率いる大和朝廷軍が唐・新羅連合軍に大敗。日本は唐の襲来の脅威にさらされる。665年、中大兄は博多湾沿いの大和朝廷の施設である「那の津の官家」を内陸に移し、防衛の拠点とした。これが「大宰府」である。大宰府がこの地に設営されたのは、地勢上の理由による。分水界であるため、見晴らしがきく。この地の前面（博多湾寄り）は左右の山が迫る狭間にあたる。ここに水城（みずき）が築かれる。東の山頂には大野城を築き、敵を迎え撃つ。後面は有明海にも日向灘にも通じ、非常時にはどちらにでも脱出できる。



都を飛鳥から大津に移したのも同じ理由で、近江京に攻め込まれば、琵琶湖を船で脱出して遠く信濃の国（長野県）まで逃げる予定だったという。

太宰府はまた、遠の朝廷（とほのみかど）と呼ばれた。

大君の 遠の朝廷と あり通ふ 島門を見れば 神代し思ほゆ 万葉集 卷三 304 柿本人麻呂

2 大宰府の観察ポイント

(1) 水城（みずき）

664年、東西から山が迫る狭隘の地に築かれた、全長1.2km、基底幅80m、高さ13mの土塁。土塁の北側には幅60m、深さ4mの堀が造られたという。東の山頂には大野城を建築、唐の襲来に備えた。

建築当時は、東端と西端の2か所のみ門を設け、警備を厳重にしていたが、現在は、鉄道、道路の建設に伴い、数か所で分断されている。

太宰帥大伴旅人（おおとものたびと）が任を終えて京へ上るときの歌が次である。

ますらをと 思へる我れや 水茎の 水城の上に 涙拭はむ 万葉集 卷六 968 大伴旅人

アクセス：JR水城駅下車すぐ

(2) 太宰府政庁跡

遠の朝廷。

唐の都長安に似せ、南北22条、東西各12坊のほぼ正方形の街区。建設时期的には、日本初



の本格的な条坊制といわれる藤原京とほぼ同時期。

大伴旅人が太宰帥として大宰府に赴任したのは727年（もしくは728年）で、この太宰帥という役職は旅人の格からいっても相当だが、これは、大伴氏の長を都から遠ざけようという藤原氏の策略で、彼が留守中に長屋王が謀反の疑いを受け、自害に追い込まれている。旅人はこの地で筑前国司山上憶良（やまのうえのおくら）と出会い、筑紫歌壇を形成する。

言はむすべ 為むすべ知らず 極まりて 貴きものは 酒にしあるらし 万葉集 卷三 342 大伴旅人
憶良らは 今は罷らむ 子泣くらむ それその母も 我を待つらむぞ 万葉集 卷三 337 山上憶良

アクセス：西鉄都府楼前駅下車徒歩15分

(3) 坂本八幡宮

我が園に 梅の花散る ひさかたの 天より雪の 流れ来るかも 万葉集 卷五 822 大伴旅人

梅花の宴が催された大伴旅人の屋敷跡に建っているのが坂本八幡宮である。令和の発表以来、参拝者が急増したという。

天平2年（730年）正月13日、この地において梅花の宴が開かれ、三十二首の歌が詠まれたが、その序文から元号「令和」が選ばれた。令和を考案したのは国文学者の中西進博士と言われているが、中西博士はこの件に関してはノーコメントである。

坂本八幡宮は、早良花崗岩に乗っている。早良花崗岩は、中生代白亜紀後期の9,300万年前に地下のマグマが固結してできたものであり、大宰府市域の岩盤のほとんどは花崗岩類である。花崗岩類は風化に弱いため、急な傾斜地等では大雨の際に地崩れ等が発生している。（1992 太宰府市史 環境資料編）

早良花崗岩は、粗粒岩相と細粒岩相が識別される。前者は岩体の主部を構成し、後者の大部分は岩体の周縁部に分布する。両者は漸移的に移化したり、細粒岩相が大小の岩脈あるいはポケットをなして、粗粒岩相を貫くことがある。（1994 福岡地域の地質地質調査所）

アクセス：西鉄都府楼前駅下車徒歩15分

(4) 太宰府天満宮

菅原道真は、894年、遣唐使停止を建議し、後の国風文化を開花させる。左大臣藤原時平の策略により太宰権帥として左遷され、当地にて亡くなる。その道真が京都の自邸の梅を想って詠んだ歌が次である。

東風吹かば 匂ひおこせよ 梅の花 主なしとて 春を忘るな 拾遺和歌集 卷十六 1006 菅原道真

その梅が京都から大宰府まで飛んでいったのが「飛び梅伝説」である。

道真の死後、時平が急死し、御所清涼殿に雷が落ちるなど、異変が続く。これらが道真の祟りであると恐れられ、その怨霊を鎮めるべく建立されたのが北野天満宮であり、道真の墓所が大宰府天満宮となる。ここに彼は、天神様という学問の神様として祭られている。

アクセス：西鉄太宰府駅下車徒歩5分

(5) 分水界

前述のとおり、日本一低い分水界が存在する。

これは、日本海と太平洋の分水界の中の最も低い地点である。博多湾が日本海なのはよしとしても、有明海が太平洋なのかは、疑問である。なお、日本一有名な分水界は、兵庫県丹波市の石生水分れであり、正真正銘の本州一低い太平洋と日本海の分水界である。

アクセス：JR二日市駅および天拝山駅付近

梅花の歌三十二首并せて序
天平二年正月十三日、帥の老の宅に萃まりて、宴会を申く。
時に、初春の月にして、氣淑く風和き、梅は鏡前の粉を披き、蘭は環後の香を薫す。
梅花詩卅二首并序
天平二年正月十三日、萃于帥老之宅、申宴會也。于時、初春の月、氣淑風和、梅披鏡前之粉、蘭薫環後之香。

（梅花の歌序）
天平二年正月十三日、長官の旅人宅に集まって宴会を開いた。時あたかも新春の初月、空気が美しく風は和やか、梅は美女の鏡の前に咲く白粉のことがよく咲き、蘭は身を飾った香の如きかおりをただよわせている。